

「少年の日の思い出」 読んだ読んだ 第七場面

「僕」はエーミールに説明しようとして試みた。「おもちゃをみんなやる」、「ちよりの収集を全部やる」などといい、あやまる気がない。それには、エーミールが自分のことを「そんなやつなんだな」と言ったからというところもあつた。エーミールに「僕」のちよりを否定され、殺意が芽生えた。こんな思ひをするなら、もうちよりは集めない、自分はだめな人間だと思ひ、つぶしてしまつた。

長屋未来さん

「僕」はエーミールにちよりを否定され、のど笛に飛びかかるところだつた。「僕」はちよりを否定され、悲しみ、「自分はなんてだめな人間なんだ」と自分を責め、ちよりを押しつぶした。

真田夏葵さん

「僕」はクジヤクヤママユを盗んだことを説明しに行ったが、軽蔑され、殺意を感じたが、自分が盗んでしまつたのは、ちよりのせいだと、自分以外に責任を押しつけて、ちよりを押しつぶしてしまつた。

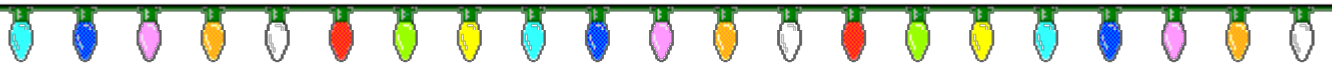
安田匡志さん

「僕」は、「僕」の宝物よりもエーミールの宝石のように価値があるものに出会い、自分の欲望に負けてしまい、エーミールの宝石のようになちよりを押しつぶしてしまつた。だから「僕」は、自分の価値のないちよりを自分の心と同じ闇の中でちよりを一つ一つつぶしてしまつた。

加藤奈瑠美さん

「僕」は自分がどうしても見たかつちよりを押しつぶしてしまつた。そのことをエーミールに言うと、許してもらえず、自分のちよりをすべてあげると言つても否定されたため、もうちよりは集めないと思ひ、つぶしてしまつた。

林 真那さん



「僕」は、エーミールのちよりを押しつぶしてしまい、エーミールに軽蔑的に見られてしまつた。それでエーミールに「あいつ」「やる」などという表現から分かるように、反省もせず、家に帰つてしまつた。

そして、ちよりの熱情から事件を起こさないようにするためにも、ちよりを押しつぶしてしまつた。

井上智元さん



「僕」は、エーミールに否定されたちよりはいらなかつたと思つたり、今までちよりを集めていた自分がバカだと思ひ、ちよりなんかを集めるもんか、と意地になつたりして、ちよりを押しつぶしてしまつた。

小河諒花さん

「僕」は、あやまらなければいけないのに、エーミールに上から言つてしまつた。そして、軽蔑的な目で見られ、そんな自分を罰するために、大切にしていたちよりを押しつぶしてしまつた。

安達麻衣さん

「僕」はエーミールのクジヤクヤママユを押しつぶしてしまつて、エーミールに説明をした。しかし、そこでも一回も謝らなかつた。その結果、エーミールが「僕」のちよりを侮辱した、「僕」は、キレそうになつたが、エーミールは最後まで冷然としていた。その結果、「僕」は、ちよりを集めていたことに対して、バカだつたと思ひ、ちよりを押しつぶしてしまつた。

伊藤雄一朗さん